

卒業前看護技術自主トレーニングの取り組み

新潟医療福祉大学看護学科・長谷川隆雄,
中山和美, 栗原弥生

【背景】

医療の高度化や在宅医療の進展など看護職をとりまく情勢が変化する中、学士課程修了者の看護技術の未熟さなど、実践能力が課題となり、平成 20 年に保健師助産師看護師学校養成所指定規則が一部改正された。それに伴って、本学科におけるカリキュラムも看護実践能力をめざしたものへと改正された。しかし、1 期生については該当しないため、その対応を学科内で検討した結果、改正カリキュラムに相当するものを実施する必要があるのではないかということになった。そこで、正規の教科目ではないことから他大学の実践を参考に、学生の自主トレーニングという方法で企画することになった。以下には、その概要と学生へのアンケート結果を中心に報告する。

【方法】

まず、取り組みの概要について述べる。目的は、卒業直前にある 4 年次学生が卒業後の就職先での実践に備えるために、就職後すぐに必要とする看護技術について、自主的にトレーニングするとした。学生の参加は自由意思によるものとし、79 名の参加があった。実施時間は 9 時から 17 時まで（2 グループに分け 2 日間実施）とし、トレーニングする看護技術は学生の希望によって、① 静脈血採血、② 口鼻腔内吸引、③ 点滴の準備と滴下調節、④ 滅菌物の取り扱いの 4 項目を選定した。指導体制については、学生が自主的に取り組むトレーニングであるが、正しい看護技術の修得に向けて全教員があたった。

終了後のアンケートについては、参加学生を対象に無記名で実施した。実施に際しては、結果を公表することがあること、提出は自由意思によることを書面で説明した。質問項目は、看護技術の達成状況に関するもの 9 項目、トレーニングへの取り組みに関するもの 2 項目、トレーニングの企画等に関するもの 2 項目の 13 項目とし、4 段階評定法で回答を求めた。また、参加しての感想など、自由記述の項目も設定した。

【結果】

アンケートの回収数は 76 名であった。分析は、4 段階評定法については項目ごとに集計し、自由記述については内容を検討し、類似のものに分類する方法で行った。結果は、4 段階評定法の項目では、「創傷処置を正しい方法で実施できた」72 名、「滅菌手袋の装着を正しい方法で実施できた」69 名の順で回答が多く、「滴下調節を正しい方法で実施できた」58 名、「他学生の静脈血採血を正しい方法で実施できた」57 名の回答が少ないという結果であった。取り組みに関しては、

「積極的に取り組んだ」は 73 名であったが、「事前学習を十分行なった」は 40 名であった。企画等については、「卒業後に役立つ」と「参加してよかった」が 76 名であった。

自由記述の内容では、看護技術に関する「課題」についての記述が多く、「根拠に基づいた看護技術を身につける」、「患者さんに不安を与えないように確実な技術を身につける」などがあった。トレーニングが「よかった」とするものでは、「就職前に練習できて自信がついた」、「今日の体験を今後に活かしていきたい」などというものであった。取り組みについては、「知識と技術の不足を再確認した」、「看護師として責任を実感した」という「反省」があった。また、「先生方のアドバイスに勇気づけられた」などという教員に対する「感謝」もあり、「要望」としては、「時間が足りなかった」、「他の看護技術も行いたかった」というものがあった。

【考察】

はじめての卒業生を送り出す本学科において、その看護実践能力をどのようにするかは大きな課題であった。本取り組みは、その一助になればということで実施したものである。

実施後のアンケート結果では、学生は看護技術について目標を達成できたとしていた。今回は実施後のアンケートのみであったが、同様の取り組みを行い、実施前後で比較した研究では、学生の自己評価は前後で優位に差があり、看護技術の向上になったと報告されている。また、卒業後 1 ヶ月後に調査したものでも肯定的な結果が示されている。本取り組みについても同様の結果であると推測できる。自由記述でも「よかった」とするものが多く、学生自身が「課題」についても明確にできていた。これらの結果は、自主トレーニングが有効であったことを示唆するものである。

しかし、「要望」にもあるように看護技術の選定や時間などの課題も残る。また、事前学習の不足を感じていた学生が多い状況は、動機づけが不十分であった結果であると考えられる。さらに、看護技術の到達目標を客観的にどう評価するか検討も必要である。看護実践能力については、多重課題にどう対処できるかが重要であるともいわれる。今後は、これらについて検討することが求められているものと考えられる。

【結論】

1. 学生は目標が達成できたとしており、今後の課題も明らかにできていたことから、卒業前看護技術自主トレーニングの実施は意義あるものであった。
2. 実施にあたっては、内容や時間、評価方法の検討、実施前の学生の動機づけなどが課題である。

【文献】

- 1) 登喜和江：学生の自信につなげる「就職前看護技術トレーニング」、看護展望, 33(13), 2008.